

研究論文

彦崎 K2 式土器の研究

— 瀬戸内地方における縄文時代後期中葉土器群の変化とその背景 —

小泉翔太

要 旨

本論は、瀬戸内地方の縄文時代後期中葉に位置づけられる彦崎 K2 式土器について、有文土器の型式学的検討から成立と展開過程を明らかにしたうえで、その背景にある地域間関係の動態を隣接地域の土器型式との関係性のありかたから論じるものである。

これまで、彦崎 K2 式の成立段階には永井 V 式・津島岡大 IV 群・四元式の三つの段階が設定されており、彦崎 K2 式も古・新の二細別が可能であることが指摘されてきた。しかし、成立段階の土器群は、器種や属性の量比によって年代差が指摘されるものの、各々が相当程度に重複する部分を有しており、細分あるいは統合できる余地を残していると考えられた。また、彦崎 K2 式の細別のうち、特に新段階に当たる内容は近畿地方の元住吉山 I 式との型式学的異同が問題となっていた。

本論では、瀬戸内地方の後期中葉土器群を対象に、型式学的な分類・変遷の検討によって個別器種の成立・変遷過程と、器種間および他地域の土器型式との関係について分析をおこなった。さらに、各器種・類型の年代差と組成の変化について、出土状況の検討から検証をおこなった。これらの分析により、瀬戸内地方の後期中葉土器群は、永井 V 式—四元式—彦崎 K2 式（古・新）—元住吉山 I 式の、4 型式 5 段階に編年できることを示した。

これをもとに、当該期の土器群の様相と変遷過程について、器種間の関係性と他地域の土器型式との影響関係に焦点を当てて考察を加えた。瀬戸内地方では、後期中葉前半に隣接する地域の影響を受容しつつ、器種間関係が再編されることで、土器様相に大きな変化が生じ、それをもとに地域的独自性が顕著な彦崎 K2 式の成立に至る過程が復元された。しかし、彦崎 K2 式新段階には、再び近畿地方の影響が強まって地域的独自性が低下し、元住吉山 I 式に至ってはほぼ近畿地方と同様の土器様相へと変化することを指摘した。

以上のように、彦崎 K2 式の成立と展開には、東西地域との地域間関係の変化と瀬戸内地方の地域的独自性の生成が目まぐるしく展開してゆくことが読み取られ、後期中葉の画期性の一端を具体的に示した。

キーワード：対象時代：縄文時代、後期中葉

対象地域：瀬戸内地方

研究対象：縄文土器、彦崎 K2 式

はじめに

彦崎 K2 式¹⁾は、瀬戸内地方の縄文時代後期中葉に位置づけられる土器型式である。その端緒は、山内清男による瀬戸内地方土器編年案の提示にあり、この編年案をもとにした「彦崎 K II（竹原）」の概説（鎌木・木村 1956）を経て、現在に引き継がれている。

しかし、この彦崎 K2 式土器を具体的にどのような範疇でとらえるのか、研究者によって若干の齟齬が生じている。その要因としては、第一に基準資料となった岡山市彦崎貝塚の調査内容や資料の全体像が長らく不明であったという、資料的な制約があった。これに加えて、後期中葉という時期的な特徴にも関係している。当該期の西日本の土器群は、後期初頭の磨消縄文

土器群から前葉の縁帯文土器群に至る連続的・広域的な型式変化とは対照的に、大きな型式学的断絶をもって成立・展開することが知られる（泉 1981b、岡田 2008・2020、福永 2020）。彦崎 K2 式もその一つであり、前段階および後続段階の土器群とのつながり、あるいは断絶のあり様について、議論を深めてゆく必要がある。

本稿では、彦崎 K2 式土器について、主として型式学的な分析によって地域の特徴や広域的な類似性を示す要素の特定を進める。これにより、瀬戸内地方における縄文時代後期中葉土器群の系譜と構造を具体的に示すことで、当該期にみられる西日本縄文文化の画期性を評価するための一助としたい。

1. 研究史と課題の整理

(1) 彦崎 K2 式の内容と位置づけ

彦崎 K2 式の提唱 瀬戸内地方には、明治期より先史時代の貝塚が多く分布することが学会に知られていた。しかし、明治・大正期における調査・研究の主眼はもっぱら古人骨の蒐集にあったため、考古学的な検討はごく限られていた。1930 年代に入って貝塚等の資料が報告されるとともに、土器編年研究に関わる論考も漸増した。後期土器に関わるものとして、三森定男による諸型式の提唱（三森 1936）や、佐々木謙・小林行雄による元住吉山式土器の広域類似性の指摘（佐々木・小林 1937、図 1）が挙げられる。

山内清男は、高島黒土遺跡や福田貝塚における自身の発掘調査成果と、酒詰仲男ら東京大学人類学教室による彦崎貝塚の発掘調査出土資料をもとに、1951（昭和 26）年の原始文化第 3 回研究会にて岡山県の縄文後晚期土器編年案を口頭で発表した。ここでは後期に福田 K1（中津）式、福田 K2 式、彦崎 K1 式、彦崎 K2 式、福田 K3 式の 5 型式が設定されたという（鎌木・木村 1956、加納 1999）。この成果は鎌木義昌と木村幹夫の概説（鎌木・木村 1956）に引き継がれ、後期の土器型式の「基本的なもの」として中津（福田 K I）、福田 K II、彦崎 K I、彦崎 K II（竹原）、福田 K III の型式名が、「不確実」として津雲 A、馬取が記載され、各型式が概説された。このとき、彦崎貝塚の出土資料が未公表であったためか、彦崎 K I に代わって津雲 A が図示され、彦崎 K II の解説には竹原貝塚出土土器（木村 1953）が用いられた²⁾。鎌木義昌と高橋護による概説でも、土器型式の内容に関する説明に大きな変化は見られないが、遺跡の存続期間をまとめた図表において、彦崎 K I 式と K II 式の間に「未銘名」とする空白期が置かれている（鎌木・高橋 1965）。

型式内容の整理と新資料の検討 1980（昭和 55）年に、間壁忠彦は竹原貝塚の資料等を用いて彦崎 K II（竹原）式の内容を整理し、さらに周辺地域の型式との対比をおこなった（間壁 1980）。ここでは、形態的特徴として薄手の器壁である点、口縁部肥厚がほとんど見られない点、凹底・丸底ぎみの平底である点など、文様意匠の特徴として横位の直線的な磨消縄文を主体とする点、LR 縄文が主体であり、結節縄文・附加条縄文や巻貝擬縄文もみられる点などを挙げている。また、隣接地域との併行関係では、近畿地方の一乗寺 K I 式・元住吉山 I 式と、九州地方の西平式およびこれに類する中四国西部の岩田第二類、伊吹町式に対比させる考えを示した。そして、彦崎 K II（竹原）式が、

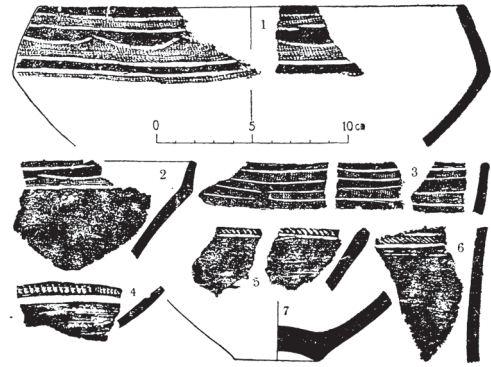


図 1 瀬戸内の元住吉山式とされた土器
（佐々木・小林 1936 を改変）

瀬戸内中部のごく限られた分布圏をもつ地域性の強い土器型式として位置づけている。また同論中では、南西四国の諸型式との対比等から、彦崎 K II（竹原）式の細別可能性も示唆する。

高橋護は岡山県史の解説のなかで、かつて「未銘名」とした空白期に該当する資料として「船津原第 1 貝塚下層など」を充てるが、具体的な資料の提示は無いままであった（高橋 1986）。これに関連して、下澤公明は船津原遺跡出土土器について、V 類を未命名、VI 類を彦崎 K II 式に対応させ、彦崎 K II 式直前の土器群の抽出を図っている（下澤 1988）。

泉拓良は近畿地方を中心とした西日本の後期土器編年を再構築してゆくなかで、瀬戸内地方の土器編年にも触れている（泉 1981）。泉は、彦崎 K II 式が近畿の北白川上層式 3 期から一乗寺 K 式にまたがって関連性を有する土器型式であることを指摘し、北白川上層式 3 期に四国・片粕式や「彦崎貝塚出土の結節縄文をもつ波状口縁の土器」を、一乗寺 K 式には主体となる土器は不明としつつ広島県洗谷貝塚 X 類の一部とそれぞれ対比させる考えを示した³⁾。そして、元住吉山 I 式に関しては、広島県大宮遺跡などの事例から瀬戸内地方にも「そのものが分布する」とし、佐々木謙・小林行雄の指摘を追認している。

千葉豊は、後期土器編年の諸課題を論じるなかで、彦崎貝塚の東大調査資料の提示をおこない、彦崎 K1・2 式の型式内容の整理をさらに進めた（千葉 1992、図 2）。千葉は、彦崎 K2 式の内容を幅広く捉え、佐々木・小林や泉が元住吉山式とした土器群も包摂する概念として再提示した。そのうえで、後述の永井 V 式や津島岡大遺跡出土土器を古段階、彦崎貝塚の資料群を中段階、元住吉山 I 式に類似した資料群を新段階とする、3 段階細別を提示した。

こうした研究の進展と相前後して、1990 年代前半

に彦崎 K2 式の成立にかかわる良好な資料群の調査・報告が相次いだ。1990 (平成 2) 年、永井遺跡の膨大な後期土器が報告され、渡部明夫は出土地点・層位と型式学的な検討にもとづき、後期前葉から末葉を永井 I ～Ⅸの 9 時期に細別する編年案を示した (渡部 1990)。渡部は、津雲 A 式を永井 I 式、彦崎 K I 式を永井 II ～Ⅳ式、彦崎 K II 式を永井 V ・Ⅵ式、元住吉山 I 式を永井Ⅶ式に対応させており、彦崎 K I ・Ⅱ式の細別を具体的に示したものと評価できる。

平井勝は、百間川沢田遺跡四元地区の出土土器について検討をおこなった (平井 1993)。平井は、四元地区出土資料の諸特徴が彦崎貝塚出土資料に見られない点を指摘し、これらを四元式として彦崎 K2 に先行する位置付けを与えた。さらに、四元式と永井 V 式、津島岡大遺跡との関連にも触れ、内湾口縁の深鉢 A 類の組成や、広口口縁の深鉢 B 類の口縁部形態・文様の型式学的な位置づけ、縄文の撚り方向や結節縄文の有無などから、永井 V 式→津島岡大遺跡→四元式という編年の序列を提示した。

津島岡大遺跡第 5 次調査では、25a 層・27b 層の 2 層から当該期の資料がまとまって出土した。阿部芳郎は、これらの土器を津島岡大後期第Ⅳ群 (以下、津島岡大Ⅳ群と呼称) として分類し、型式と層位による検討から四元式に先行する位置づけを与えた (阿部 1994)。また、その系譜に関して、口縁部外面施文の深鉢に着目し、津雲 A 式から未命名型式を介して連続する可能性を指摘した。同報告で、橋本雄一は口縁部内面に施文する深鉢を取り上げ、その内面文様 (内文) の系譜を九州地方の鐘崎式に求めた (橋本 1994)。そして、文様属性の数量的変化から、永井 V 式から彦

崎 K2 式にかけての変遷を追認した。

基準資料・標識遺跡の再評価 2000 年代には、山内清男が編年研究の基準とした高島黒土遺跡 (矢野ほか 2004) や彦崎貝塚の東大調査資料について報告 (山崎・高橋 2007) と再検討 (山崎 2007) がなされたほか、彦崎貝塚の範囲確認調査 (田島編 2006) 等も行われ、学史的に重要な資料の実態が明らかとなった。

高島黒土遺跡の再報告に際し、原稿・メモ等の諸史料も公開された点は、研究史上特筆すべきである。その中で、山内が残したメモに「彦崎 K1-2 中間 (の式)」との記述があり、高島黒土遺跡の資料によって未命名の型式が仮設されていたことが明らかになった。整理を担った矢野健一らは、8 群 d 類土器と分類した、口縁部外側が肥厚し縄文を施文する一群がこれにあたるものと推定している (矢野ほか 2004)。

(2) 研究史の到達点と課題

以上の研究により、彦崎 K2 式がどのような土器群であるかについては、間壁による竹原貝塚出土資料をもとにした検討を基礎としつつ、基準資料をもとにした千葉や山崎の論考により、一定の共通見解が得られている。

また、彦崎 K2 式の直前段階に関しては、永井 V 式・津島岡大Ⅳ群・四元式の設定によって、年代的な分離と土器群の様相把握が可能である。さらに、彦崎 K2 式も細別が可能であることが、複数の観点から指摘されている。

いっぽうで、これまでの検討は遺跡単位でのまとまりを前提とした議論によって組み立てられてきた。特に彦崎 K2 式直前段階の検討では、編年は量比の変化



図2 彦崎貝塚の彦崎 K2 式土器 (千葉 1992)

によって傾向として示されるが、その対象とされた各遺跡の出土資料群は包含層や土器だまり、流路といった開放環境下での堆積物であり、資料の性格や時間幅は一定でない。型式学的観点からは、各々が相当程度に重複する部分を有しているように思われ、細分あるいは統合できる余地を残していると考ええる。

また、彦崎 K2 式の新相とされる時期については、近畿地方の元住吉山 I 式と同型式とする考え（泉 1981）と、彦崎 K2 式に含める見解（間壁 1980、千葉 1992・2010）の二者がある。すなわち、両者の型式学的な異同の把握が、各型式の理解を深めるうえで不可欠となる。

さらに、彦崎 K2 式の広域編年との対比、およびその背景にある地域間関係については、十分に議論が及んでいない。冒頭述べたように、後期中葉の西日本では土器の型式変化に画期が認められる。これらは、各地域で個別に生じたものではなく、一定の連動性が認められる（泉 1981、福永 2020）。すなわち、当該期の各地域の土器型式変化にみられる画期性は、地域間関係の変化と密接に関連しているものと予想される。したがって、彦崎 K2 式が隣接する土器型式群とどのような関係性にあったかを捉えることが肝要である。

本稿では、瀬戸内地方の後期中葉土器群を対象に、

型式学的分析から当該期の各器種の変遷および器種構成・器種間関係の変化を明らかにする。これにより、瀬戸内地方における縄文時代後期中葉土器群の編年を示し、その背景にある地域間関係の動態を考察する。以上の検討により、当該期にみられる西日本縄文文化の画期性の実態追究を試みる。

2. 分析

（1）型式学的検討

本稿で分析対象としたのは、瀬戸内地方に所在する 37 遺跡から出土した、後期中葉に比定される土器資料である（図 3）。これらの土器について、器形および文様の施文される範囲との関係から器種を設定し、各々の細部形態や文様構成、文様意匠などの属性により、細別と型式学的組列の検討をおこなう。

屈曲深鉢 屈曲等によって口縁部・頸部・胴部の三帯に区分される有文深鉢を「屈曲深鉢」とする。口縁部の形態と文様構成によって、Ⅰ～Ⅳ類に細分する。

屈曲深鉢Ⅰ類は口縁部が肥厚して作出され、主文様と区画文様が配されるもの（図 4-1～4、以下図 4-省略）。口縁端部内面が玉縁状を呈する点も特徴である。（1・2）は口縁部の区画文と単位文の分離が顕著で、口縁部幅も狭いのに対し、（3・4）は単位文が不明瞭

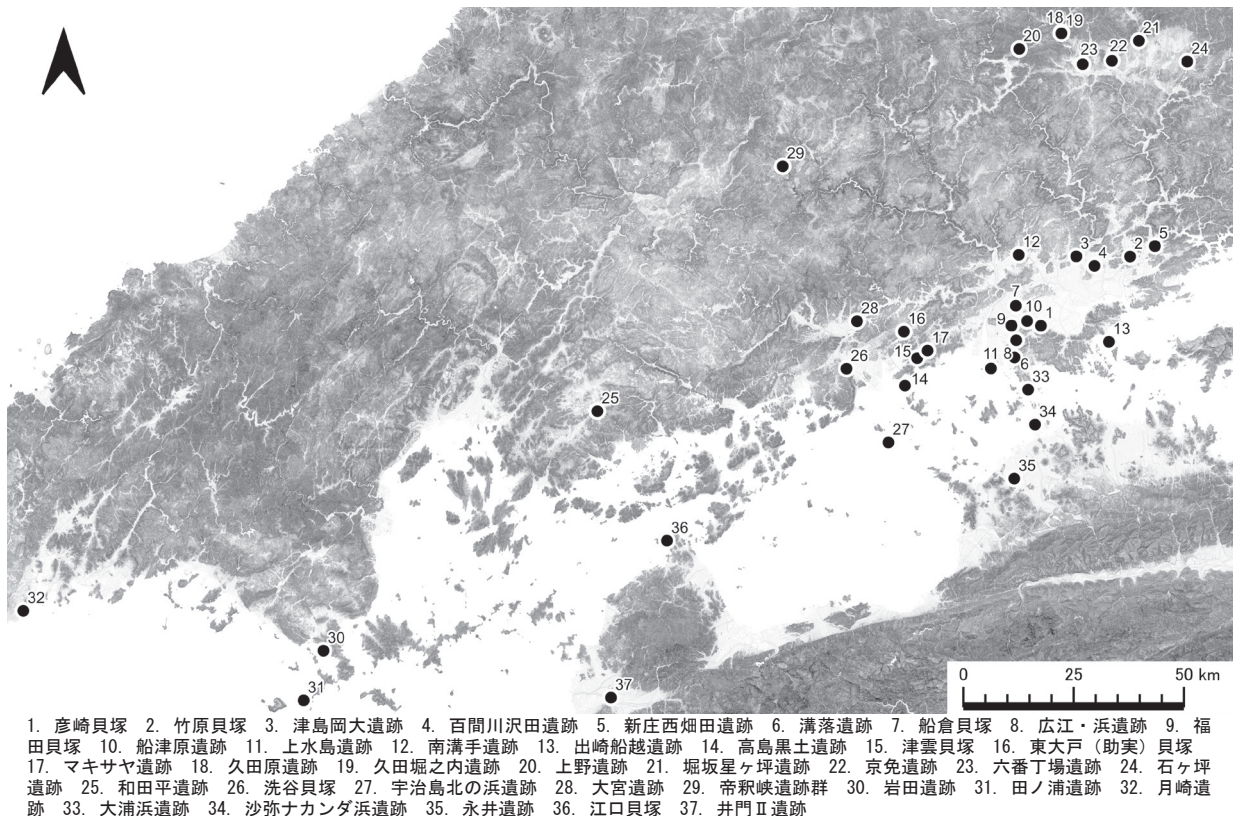


図 3 分析対象遺跡の位置

化して横位展開の傾向が強まり、口縁部も幅広化する型式変化を想定できる。後者は、後述する屈曲深鉢Ⅱ類と近い特徴を示すようになる。

阿部芳郎はこの類の系譜を津雲 A 式 (図 6-1・2) 等の狭義の緑帯文土器に求めた (阿部 1994)。しかし、山崎真治が指摘するように、彦崎 K1 式では肥厚口縁の土器は退嬰化しており (山崎 2007)、これらを繋ぐ類型も想定しがたい。また、津雲 A 式の膨隆・屈折口縁に比べて、屈曲深鉢Ⅰ類は平板的な肥厚で、頸部からスムーズな屈折部を作出している。こうした特徴は、口縁端部内面の玉縁状肥厚とあわせて、四国南西部・片粕式や九州東北部・北久根山式併行の有文深鉢 (図 6-3~5) にみられる口縁部成形技法と類似しており、これらとの関連で捉えるべきものと考ええる。ただし、屈曲深鉢Ⅰ類は沈線による主文様+区画文の構成をとるのに対して、片粕式等では平行線文・クランク文を基調としており、この間にも乖離が大きい。現状では、これらの具体的な成立過程は課題とせざるを得ないが、瀬戸内~九州の広い範囲において、狭義の緑帯文土器とは異なる系譜下の肥厚口縁をもった土器群があらたに出現するものと考ええる。

屈曲深鉢Ⅱ類は口縁部がゆるく内湾して作出されるもの。口縁部の文様構成によって細分する。Ⅱ a 類は多重沈線文・区画文・平行沈線文などが配されるもので、四元式の標徴となる類型である (5~10)。単位文は小 J 字文が通有で、これを頂点とした三角形区画文が横位に連続する構成をとる。胴部まで遺存する例は少ないが、四元例 (7) から、胴部にも口縁部と同様の文様が展開するものと想定される。器形や文様施文域の構成は、近畿地方の北白川上層式 3b 期⁴⁾ やこれに併行する北陸西部のもの (図 6-6・7) と近似し、その影響下で成立したものと捉えうる。しかし、単位文と区画文の連繋が強く、沈線の多重化が乏しいほか、口縁端部を丸くおさめる点に差異が認められ、地域的な変異が明確である。このうち文様構成に関しては、北久根山式併行の有文深鉢 (図 6-8・9) と近く、いずれもその系譜を後述する広口浅鉢Ⅰ・Ⅱ類を介して、九州・鐘崎式 (図 6-10・11) に求めうる。(9・10) は、文様意匠が直線化・硬直化し、平行線化が進展している点から、新相に位置づけられる。(9) に新出属性の多段結節縄文が見られる点も、これを補強しよう。

Ⅱ b 類は口縁端部直下に 1 条の沈線がめぐり、それ以下を縄文帯とするもの (11~13)。彦崎 K2 式を標徴する類型である。胴部まで遺存する例がないが、大阪府淡輪遺跡の例 (図 6-12) から、胴部を縄文のみ

とするのが通例と想定される。縄文の撚り方向が LR 優勢となる点や、内湾する口縁部形態からみて、Ⅱ a 類と同様に北白川上層式 3b 期の深鉢からの影響がうかがえるが、縄文帯を主たる文様とする点で後述の広口深鉢Ⅰ・Ⅱ類と近縁で、より地域的な様相の顕著な類型と捉えられよう。直線的な文様構成をとる点や、結節縄文・押し沈線など新出属性がみられる点から、Ⅱ a 類の新相に併行すると考えられる。

屈曲深鉢Ⅲ類は口頸部が稜をもって内屈したのち、口縁部がゆるく内湾して作出されるもの (14~17)。平行帯を基調とする文様構成で、磨消縄文帯を有し、沈線内刺突や結節縄文・絡げ縄を多用する。Ⅰ・Ⅱ a 類から、主文様となる単位文が簡略化・小型化したことによって、横位の連繋がより顕著化したものと理解することができる。この点、Ⅱ a 類新相と共通性が高く、Ⅱ b 類と同様にこれらに併行するものと考えられる。Ⅲ類の諸特徴は、岡田憲一が「佃下層期」の標徴とした内湾内屈口縁深鉢 (図 6-13、岡田 2020) と共通するもので、瀬戸内で成立した本類が近畿へと波及したものと考えられる。他方、四元例 (16) の胴部文様にみる三角形文は、九州東北部・松丸式との類縁関係を指摘できよう (図 6-14・15)。

屈曲深鉢Ⅳ類は口頸部がく字形に屈曲するもので、多段の磨消縄文帯を配するもの。沈線文のみのものをⅣ a 類 (18~20)、単位文として隆帯文を付すものをⅣ b 類 (21・22) とする。Ⅳ a 類は、Ⅲ類と文様構成が類似し、口縁部幅が狭くなって文様意匠も直線的に硬直化したものとして、連続的な型式変化をうかがえる。また、こうした型式変化の方向性から、縄文・擬縄文帯と無文帯が多段に重畳する (18・19) は古相、縄文・擬縄文帯が上下一対に整理された (20) は新相に位置づけられる。

Ⅳ b 類は、近畿地方の一乗寺 K 式の標徴となる有文深鉢 (図 6-16) と同様の特徴をもつ。貼付隆帯文は上述の類型にはみられない新出の属性であり、近畿地方の影響によって出現するものと考えられる。ただし、瀬戸内では出土数が少なく主体的な器種ではない可能性がある。

屈曲深鉢Ⅴ類は口頸部がく字形に屈曲するもので、口縁部の上下端に平行沈線がめぐり、中央部を無文帯とするもの。沈線文の単位文をもつものをⅤ a 類 (23・24)、隆帯文のものをⅤ b 類 (25~27) とする。Ⅴ類は近畿地方の一乗寺 K 式から元住吉山Ⅰ式 (図 6-17・18) との共通性が高く、特にⅤ b 類では縄文施文が乏しい点を除き、近畿地方のものと弁別することが

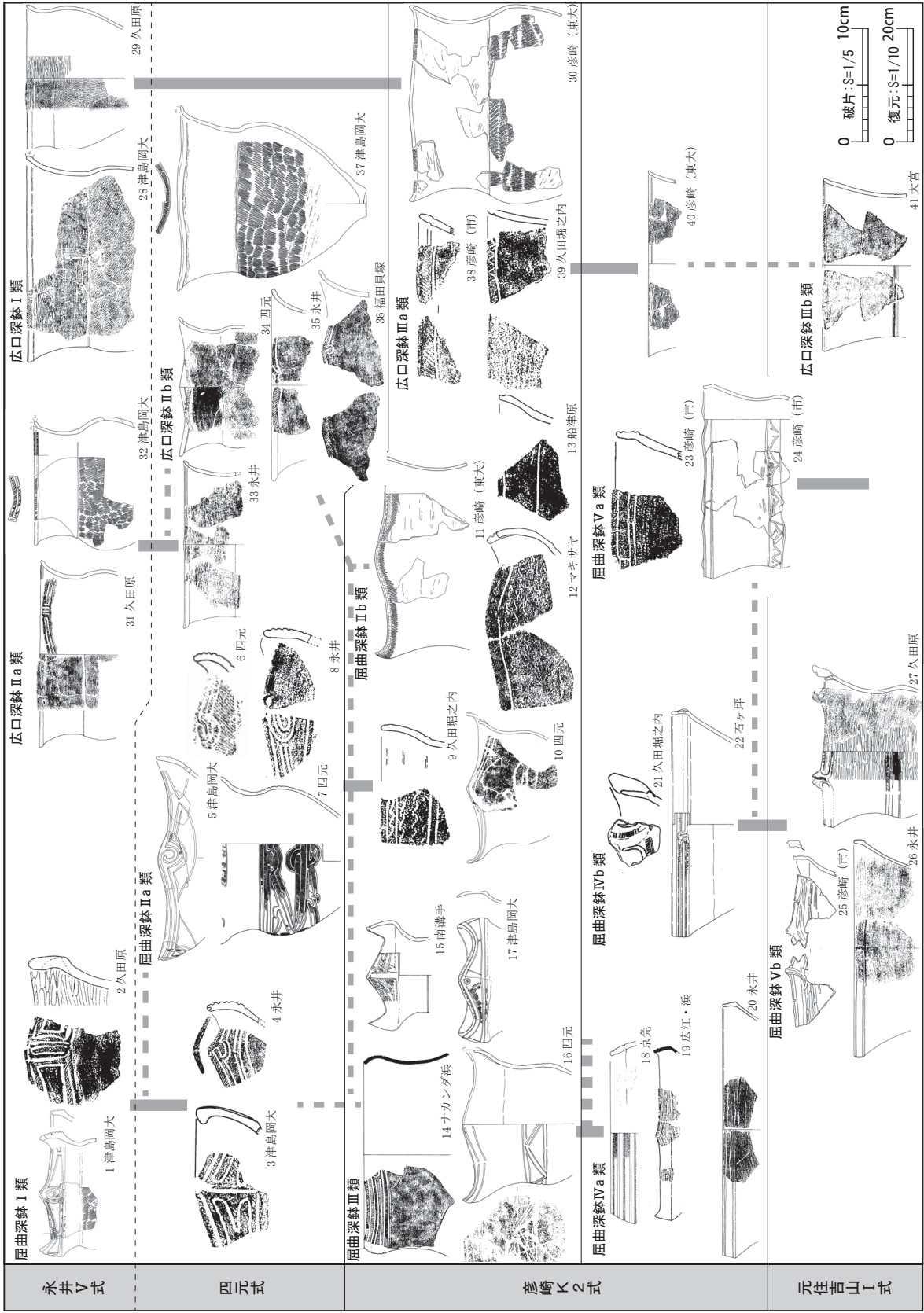


図 4 瀬戸内地方の後期中葉土器群の分類と変遷 (1) (各報告書等より引用)

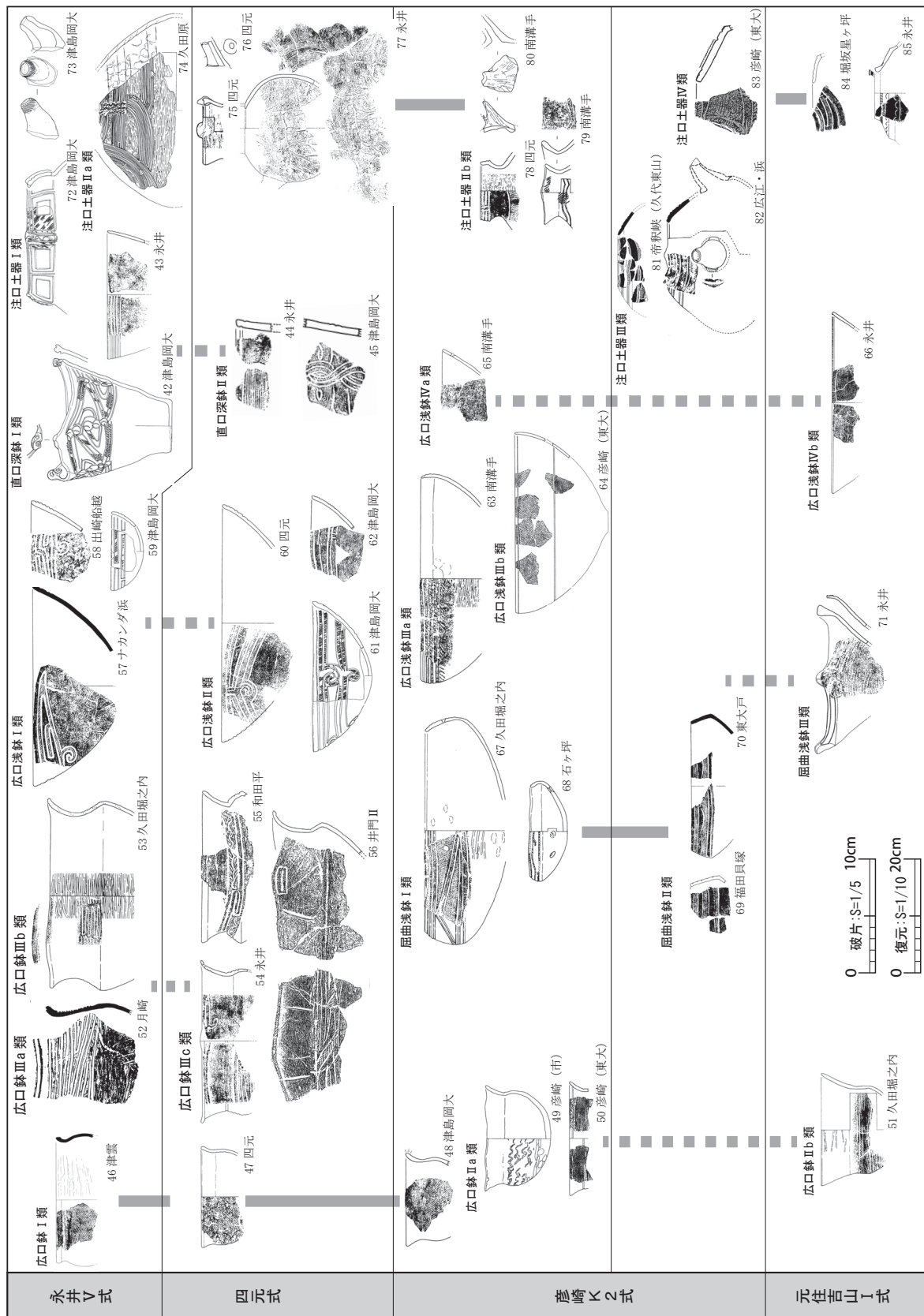


図5 瀬戸内地方の後期中葉土器群の分類と変遷 (2) (各報告書等より引用)

困難である。近畿での型式変化（深井・岡田 1994、小泉 2014）を参照すると、V a 類が V b 類より先行するものと想定される。また、V b 類でもノ字状・I 字状の隆帯文を付す（25・26）は古相に、指頭状に発達した（27）は新相に位置づけられる。

広口深鉢 頸胴部界にくびれをもち、口頸部が外反して立ち上がる有文深鉢を「広口深鉢」とする。口縁部の形態と文様構成によって、I～IV 類に細分する。

広口深鉢 I 類は口縁部外面に縄文のみを施文するもの（28～30）。胴部も縄文のみで、斜縄文のほか、異方向回転による羽状縄文もみられる。口縁部形態に着目すると、外面肥厚が明瞭で、縄文施文部が四角く突出するような形態を呈するもの（28・29）から、肥厚が失われて口縁端部付近に狭い縄文帯を有するもの（30）へ型式変化すると考えられる。この変化は漸移的で、中間的な様相を示すものも多いため、個々の位置づけには困難が伴う。

広口深鉢 II 類は、口縁部内外面が肥厚し、内面に沈線文をもつもの。胴部は I 類と同様に縄文のみが施される。口縁部内面の文様構成によって細分する。II a 類は内面に 2 条以上の平行沈線を配し、縦位短沈線文や J 字文等の単位文を配するもの（31～33）。文様意匠や文様構成に屈曲深鉢 I 類・II a 類との共通性が高く、これらと共時的な関係にあるものと考えられる。

II b 類は、内面に 1 条の沈線を巡らせ、クランク文や J 字文、玉抱き文など小ぶりの単位文を配するもの（34～37）。II a 類の口縁部文様が縮小したものとも理解できるが、それだけでなく、内文の文様意匠は、橋本雄一の指摘するように鐘崎式（図 6-10・11）との関連性をうかがえる（橋本 1994）。加えて、クランク文・鉤状文の系譜を考えるうえでは、平城 II 式とされてきたものの一部（図 6-20）にみられる口縁部内面文様との関連についても考慮すべきであろう⁵⁾。

広口深鉢 III 類は口縁部の肥厚が無いもので、内外面に幅の狭い縄文帯を巡らせるもの。施文原体によって細分し、結節縄文・絡げ縄を含む縄文施文のものを III a 類（38～40）、キザミ施文のものを III b 類（41）とする。III a 類は胴部も縄文施文のみとするのが通有であり、II b 類が口縁部の肥厚と内文を喪失することで成立するものと考えられる。いっぽう III b 類は胴部に平行磨消縄文帯をもつ点で、屈曲深鉢 V 類と共通性を有し、かつ元住吉山 I 式（図 6-19）とも強い類縁関係を示す。III b 類にキザミという新出の属性が用いられる点も考慮すると、III a 類の形態的特徴を基礎としつつ、他類や他型式からの影響によって III b 類が新たに成立する

ものと考えられる。

直口深鉢 体部に屈曲がなくバケツ形に開く形態の有文深鉢を「直口深鉢」とする。器形、文様構成ともに関東地方の堀之内 2 式に系譜を求めることができる。文様構成によって I・II 類に細別する。

直口深鉢 I 類は、多重沈線によって横位展開の文様をほどこすもの（図 5-42・43、以下図 5-省略）。津島岡大例（42）は全形のわかる好例で、突起文の形態から関東・堀之内 2 式新段階に併行する位置づけを与えられる。しかし、内面文様が発達せず、体部文様意匠も関東地方のものとは懸隔が大きい。いっぽう近畿地方の北白川上層式 3a 期や北陸西部の同様の器種には類似するものがみられる（図 6-21・22）ことから、堀之内 2 式後半に併行する段階で、北陸以西において在地化が進展したものの影響が瀬戸内地方にまで波及するものと捉えたい。

直口深鉢 II 類は、条線文によって文様をほどこすもの（44・45）。小破片のみで全体の文様構成が判明するものを欠くが、平行帯や連鎖状のモチーフから、堀之内 2 式末～加曽利 B1 式初頭の関東～信越地方のものと共通する特徴をもつ。関東地方の編年研究を参照すると、I 類よりも後出する位置づけを与えよう。

広口鉢 頸胴部界にくびれをもち、口頸部が外反して立ち上がるもので、口径より器高が小さく扁平なプローションとなる有文鉢を「広口鉢」とする。口縁部および胴部の形態と文様意匠によって細別する。

広口鉢 I 類は、口縁部外面に縄文のみを施文するもの。広口深鉢 I 類と同様の特徴を有し、型式変化についても外面肥厚が明瞭なもの（46）から、肥厚を失っていく変化（47・48）が想定される。

広口鉢 II 類は、口縁部の肥厚がみられないもの。胴部が球形で縄文のみをほどこす II a 類（49・50）と、平行磨消縄文帯によって施文する II b 類（51）に細分する。II a 類は I 類の口縁部肥厚と縄文施文が失われることで成立するものと考えられ、一部に広口深鉢 III 類の影響によって内面施文をもつものもみられる（50）。II b 類は胴部に平行磨消縄文帯をもち、広口深鉢 III b 類と同様に元住吉山 I 式（図 6-26）に対比することができる。

広口鉢 III 類は、強く屈曲する胴部上半に多重沈線文・磨消縄文による文様意匠を展開するもの。九州北東部の鐘崎式～北久根山式併行の有文鉢と同様の特徴を示す。器形および胴部文様構成によって細分する。III a 類は、口頸部が短く外折し、胴部には磨消縄文または多重沈線により横位展開の文様意匠を配するもの



図6 彦崎 K2 式に関連する資料 (各報告書等より引用)

(52)。鐘崎Ⅱ・Ⅲ式から直接的に系譜するが、文様意匠の直線化・硬直化が著しく、「鐘崎式最新相」(水ノ江・前迫 2010、図 6-23)とされた段階に位置づけうる。

Ⅲ b 類は頸部が長く外反し、胴部には縄文地に沈線文による文様意匠を配するもの (53)。事例数は少ないが、頸部の長い形態や、縄文地とする点で平城貝塚例 (図 6-20) や片粕式 (同 3・4) との関連性がうかがえる。

Ⅲ c 類はⅢ b 類と同様に頸部が長く外反するもので、強く屈曲する狭い胴部上半に磨消縄文意匠を配するも

の (54~56)。北久根山式併行の有文鉢に対比でき、両者に地域の変異は認めがたい (図 6-24・25)。

広口浅鉢 体部に屈曲がなく、口縁部がゆるく内湾しつつ立ち上がる皿形またはボウル形の有文浅鉢を「広口浅鉢」とする。文様施文手法と文様構成によってⅠ~Ⅳ類に細分する。

広口浅鉢Ⅰ類は、2条沈線の細い磨消縄文帯によって L 字や鉤手状入組文が付帯する逆三角形意匠や方形区画文を横位に展開するもの (57~59)。文様意匠は九州の小池原上層式~鐘崎式の浅鉢に系譜を求める

ことができ、この文様が外面上方に幅狭化してゆくことで成立するものと考えられる。

広口浅鉢Ⅱ類は、多重沈線の磨消縄文帯によって横位連繋の文様意匠を施文するもの（60～62）。Ⅰ類の文様意匠が多重線化することで成立すると捉えられるが、こうした意匠は前述のように屈曲深鉢Ⅱ類とも共通性が高い。

広口浅鉢Ⅲ類は、平行沈線の磨消縄文帯によって文様意匠を描くもの。文様構成によって細分し、屈曲深鉢Ⅲ類と同じく多段の平行磨消縄文帯をもつものをⅢa類（63）、屈曲深鉢Ⅱb類と同じく幅広い縄文帯をもつものをⅢb類（64）とする。いずれも組成に占める割合は低く、型式変化も捉えがたいことから、有文深鉢から派生的に生じた器種と理解できる。

広口浅鉢Ⅳ類は、皿形を呈し口縁部内面に文様を施文するもの。施文原体によって細分し、結節縄文・絡げ縄を含む縄文施文のものをⅣa類（65）、キザミ施文のものをⅣb類（66）とする。広口深鉢Ⅲ類の細分と対応するもので、同等の型式変化が想定される。Ⅳb類は元住吉山Ⅰ式（図6-28）に対比できる。

屈曲浅鉢 体部が開いて口縁部が屈曲するものを「屈曲浅鉢」とする。口縁部形態と文様構成によって、Ⅰ～Ⅲ類に細分する。

屈曲浅鉢Ⅰ類は、口頸部界で内屈し、ゆるく湾曲しつつ立ち上がるもの（67・68）。平行帯を基調とする磨消縄文意匠をもち、屈曲深鉢Ⅲ類と形態・文様意匠の共通性が高い。また、（67）は九州北東部・松丸式（図6-15）の胴部文様意匠とも類縁関係がうかがえる。

屈曲浅鉢Ⅱ類は、口頸部がく字形に屈曲するもので、多段の磨消縄文帯を配するもの（69・70）。屈曲深鉢Ⅳ類との共通性が高く、その型式変化を参照すると屈曲浅鉢Ⅰ類からの連続的な型式変化を想定できる。

屈曲浅鉢Ⅲ類は、口頸部がく字形に屈曲するもので、口縁部の上下端に平行沈線がめぐり、中央部を無文帯とするもの（71）。屈曲深鉢Ⅴb類と同様の特徴を有し、元住吉山Ⅰ式（図6-27）に対比しうるものである。

注口土器 口縁部がすばまる壺形の器形で、注口部を有すると考えられるものを「注口土器」とする。器形および文様構成によって、Ⅰ～Ⅳ類に細別する。

注口土器Ⅰ類は、口縁部が内湾して瓢形を呈するもの（72）。その他の器種にはみられないような区画文と隆帯文をもち、独自性が強く系譜関係も明らかでない。これに対応する注口部として、付け根が下膨れ状を呈して先端部に縄文帯を有するもの（73）を想定するが、類例の増加をまって改めて検討する必要がある。

注口土器Ⅱ類は体部が球形または縦位に間延びしたゆるい算盤玉形を呈し、口頸部が立ち上がるもの。細長い筒状の注口部が取り付け。体部には、曲線的な文様意匠を配する。文様描出技法によって細別し、櫛歯状工具による条線文のものをⅡa類（74～77）、多重沈線の磨消縄文によるものをⅡb類（78～80）とする。Ⅱa類は、形態・文様ともに堀之内2式末～加曾利B1式に盛行する注口土器とよく類似し、その影響が瀬戸内地方にも顕著であったことがうかがえる。条線文の縁取りが無く、体部に屈曲のある（74）が古相に、沈線によって条線文の縁取りがなされる（77）が新相に位置づけうる。Ⅱb類は、形態や文様構成はⅡa類からの系譜を引くが、平行磨消縄文や区画文といった、在地的な意匠に転換したものと考えられる。

注口土器Ⅲ類は、体部中半で屈曲し、上半がドーム状を呈するもので、体部上半に平行磨消縄文帯による文様意匠を展開するもの（81・82）。一乗寺K式の注口土器（図6-29）に類似し、巻貝擬縄文や二枚貝キザミを多用する点も共通性が高い。

注口土器Ⅳ類は、体部中半で屈曲する算盤玉形を呈し、体部上半に段をもつもの（83～85）。体部上半に平行磨消縄文帯による文様意匠をもつ。注口土器Ⅲ類とは形態・文様に共通性が認められ、これが扁平化して中間に段が形成されることで成立するものと考えられる。一乗寺K式から元住吉山Ⅰ式にかけて盛行する注口土器（図6-30）と同様の特徴をもち、Ⅲ類とともに近畿からの影響によって出現・展開するものと考えられる。

（2）出土状況の検討

各器種の分類と変遷について、これまで基準資料として位置付けられてきた資料群と、一括性のある資料および層位的出土事例から検討をおこなう（表1）。

まず、彦崎 K2 式の基準資料となった彦崎貝塚の東大調査資料をみると、屈曲深鉢Ⅱb・Ⅲ類、広口深鉢Ⅰ・Ⅲa類、広口鉢Ⅰ・Ⅱa類、広口浅鉢Ⅲb・Ⅳa類、注口土器Ⅲ・Ⅳ類が主たる器種となっており、まとまりをもつ資料と評価できる。したがって、これらを彦崎 K2 式の中核的な器種と捉えて良いだろう。南溝手遺跡出土土器は、包含層からの出土ではあるが、屈曲深鉢Ⅱb・Ⅲ類、広口深鉢Ⅲa類、広口鉢Ⅰ・Ⅱa類、広口浅鉢Ⅲb・Ⅳa類、注口土器Ⅱb類が組成し、彦崎 K2 式のなかでも古段階にまとまるものと位置づけられる。

次に、彦崎 K2 式に先行するものと位置づけられて

表 1 各器種・分類の出土状況

遺跡名	出土遺構等	屈曲深鉢					広口深鉢					直口深鉢		広口鉢					広口浅鉢					屈曲浅鉢			注口土器				
		I	II a	II b	III	IV a	IV b	V	I	II a	II b	III a	III b	I	II	I	II a	II b	III a	III b	IV a	IV b	I	II	III	I	II a	II b	III	IV	
遺跡名	27b層	11	2	3	4			68	12	82	83				47												1	2			
	25a層	2	3		1			6	8	13	10		1	1	32							12	7		1						
久田原遺跡	土器溜まり1	2						8	4		1				6																
永井遺跡	B・C-18区包含層							4	2	5	1		3								1							1			
	F-10サブトレ							2		4																					
百間川沢田遺跡（四元地区） -	-	12	5	2				81	3	20	22		1	14	1					3	14		3	1			2	1			
南溝手遺跡	-		9	8				2	1	13			1	2							1	2						1			
彦崎貝塚（東大調査）	-	1	9	11	1			3		8	1		7	2		1					3	3							1	1	
永井遺跡	SR8501 XI層							2		1			1																		
	SR8501 X層							18	2	4	2				11						4	1			1				1		
	SR8501 VI層	1		1			1	7	1	1	3	18		1				1			2			3							
	SR8507 E-8 IX層	1						4		1							1														
	SR8507 E-8 VIII層		1					2							1			1	1	1									1		
	SR8507 E-8 VII層	2	6		1			19	4	10	5	1	3	1	5			1			2	3									
	SR8507 E-8 VI層	1	3	4	2		5	7	2	11	3	1		9			1	1		1	4							1	1		
	SR8507 E-8 V層	3	1	1			2	1		4	3				1									1					2		
	SR8507 E-8 IV層		1	1			1	4	1		1	1			1					2											
	SR8602 E・F-15・16 IX層	1						1							2			1													
	SR8602 E・F-15・16 IX層上部						1	6		3	2				4									1							
	SR8602 E・F-15・16 VIII層					2		1													2										
	SR8602 E・F-15・16 VII層						1	1		1		1	1		1	2		1													
	SR8602 E・F-15・16 VI層	1	4	2			1	9		8	9	2	3		6					1		1		2		1			1	3	
	SR8602 E・F-15・16 V層							1			2														1						
	SR8602 E・F-15・16 IV層	1		1			5	6		3	7	1			3			1	1		1	4		3							

凡例

1点

2～10点

11点以上

凡例 1点 2～10点 11点以上

きた資料群を見てみよう。永井V式の基準とされたB・C-18区包含層およびF-10サブトレ層出土土器は、屈曲深鉢がみられず、広口深鉢I・II a・II b類、直口深鉢I b類、広口鉢I・III b類、注口土器II a類が伴う。いっぽう、久田原遺跡土器溜まり1では、屈曲深鉢I類、広口深鉢I・II a類、広口鉢I類がほぼまわっており、永井V式とされる内容をより純粋に示す資料群と考えられる。広口深鉢II b類についてはこの段階に出現するとみるが、後続の四元式に主体的なものであると考える。

四元式の基準となった百間川沢田遺跡四元地区では、実際には彦崎K2式とすべき資料が一定量含まれていることがうかがえる。それらを差し引いた残余が、屈曲深鉢II a類、広口深鉢I・II b類、直口深鉢II類、広口鉢I類、広口浅鉢II類、屈曲浅鉢I類、注口土器II類であり、これを四元式の主たる器種と理解できよう。

上述の資料群と比較すると、津島岡大遺跡の25a層・27b層出土土器群は、いずれも永井V式から彦崎K2式にかけての時間幅をもったものであることが指摘できる。そのうえで、特に27b層のうち四元式・彦崎K2式にあたるものを差し引いた、屈曲深鉢I類、広口深鉢II a類、広口浅鉢I類、注口土器I・II a類は、永井V式の内容を補強するものと考えられる。

彦崎K2式以降については、単独でまとまりをもった資料の出土事例は無いが、永井遺跡の流路出土資料から前後の時期を差し引いた残余によって、屈曲深鉢V類、広口深鉢III b類、広口浅鉢IV b類、屈曲浅鉢III類、注口土器IV類を主たる器種とする一時期を指定することができよう。これは、永井VII式（渡部1990）に

対応するものである。当該期はまとまった資料に乏しいため、今後の資料の増加によって再検討すべきではあるものの、現状で確認できる器種を見る限り、いずれも近畿・元住吉山I式と同様の特徴を有するもので占められている。

3. 瀬戸内地方後期中葉土器群にみる地域間関係の動態

瀬戸内地方の後期中葉土器群について、型式学的な分類・変遷および出土状況の検討によって、4型式5段階に編年できることを論述してきた。本論で設定した各型式は、従前に設定・提唱された土器型式内容を大きく逸脱するものではなく、その内容の精査と充実が検討成果と言えよう。これをもとに、当該期の土器群の様相と変遷過程について、器種間の関係性と他地域の土器型式との影響関係に焦点を当てて考察を加える。

永井V式は、屈曲深鉢I類と広口深鉢II a類の成立によって画される。前段階の彦崎K1式期には口縁部の退嬰化が顕著であり、有文深鉢が装飾性を失っていく変化が明瞭である（山崎2007・幸泉2014・2016）。これに反するように、永井V式で再び口縁部装飾が顕在化する状況は、瀬戸内地方のみならず緑帯文土器の分布していた東海・北陸地方～九州北部に共通する動向であり（千葉編2010）、広域に連動する変化として捉えられる。ただし、その具体的な成立要件や成立時期は各地域によって若干の異同があり、単相的には理解しえない。永井V式に関しては、口縁部文様に区画文・クランク文をもつ磨消縄文意匠を用い、RL縄文が主体となる点で、同時期の広口浅鉢I類、さらには

その祖型となる九州・鐘崎式に文様系譜を求めることができる。九州系の有文鉢・浅鉢は、彦崎 K1 式期から瀬戸内地方の土器組成に含まれており、それが有文深鉢の文様へ転化されるような、器種間関係の再編がおこなわれたと理解できよう。他方では、直口深鉢や注口土器にみられるように、近畿地方を介して関東・堀之内 2 式後半～末に位置づけうる器種が流入していることも明らかである。ただし、関東のものとの類似度は低く、近畿から東海・北陸西部の同類の土器群に対比しうるもので占められる。すなわち、永井 V 式では、従来の器種構成を引き継ぎつつも器種間関係の再編がみられ、さらに他地域の影響も広く受容して異型式由来の器種が並立しており、新たな土器群の成立へと至る過渡的段階としての様相を見出すことができる。

永井 V 式の広域編年上の位置としては、広口鉢Ⅲ類から九州北部・鐘崎式最新相（水ノ江・前迫 2010）と、直口深鉢・注口土器Ⅰ類から近畿・北白川上層式 3a 期と、それぞれ接点を有すると考えられる。したがって、近畿地方よりも瀬戸内地方において口縁部文様の再出現が先行する可能性があるが、北久根山式や片粕式の成立過程とともに、改めて検討する必要があるだろう。

永井 V 式から四元式へは、連続的な型式変化を示す器種が多く、型式としての安定性がうかがえる。そのなかで、四元式の標徴となる屈曲深鉢Ⅱ a 類の成立には、近畿・北白川上層式 3b 期の有文深鉢からの影響が明確で、前段階に引き続き近畿から新たな器種の流入が続いていることが読み取られよう。しかし、ここでも文様意匠の点では地域的独自性を維持しており、有文浅鉢Ⅱ類に用いられる九州系磨消縄文意匠が取り入れられている。したがって、永井 V 式にみられた過渡的様相が四元式にも引き続き認められ、在地的な特徴をもつ器種と、他地域に系譜する器種が並立する様相が顕著に認められる。

このように、永井 V 式から四元式にかけて、在地的な様相を基礎としつつ、東西両地域の影響を取り入れることで展開した土器群は、彦崎 K2 式段階に至って、これを標徴する屈曲深鉢Ⅱ b 類や、同種の文様意匠をもつ広口浅鉢Ⅲ b 類が成立し、地域的独自性がいっそう明確化する。また、屈曲深鉢Ⅲ類は、従前の屈曲深鉢Ⅰ・Ⅱ a 類の要素が混交することによって成立したものと理解したが、近畿・一乗寺 K 式の成立にあたっては、「佃下層期」（岡田 2020）にこの屈曲深鉢Ⅲ類が瀬戸内から近畿に影響を与えることが重要な契機となる（岡田 2008・2020、小泉 2014）。他方で、九州地方との関わりは潜在化する傾向を示し、従前の広口鉢Ⅲ

類にみたような直接的な器種の受容としてではなく、文様意匠レベルでの限定的な影響関係に留まってゆくことが指摘できる。

彦崎 K2 式新段階に至ると、地域的独自性が継続して認められる屈曲深鉢Ⅳ a 類や屈曲浅鉢Ⅱ類が組成として含まれるものの、他方で近畿・一乗寺 K 式と共通性の高い屈曲深鉢Ⅳ b・Ⅴ a 類や注口土器Ⅲ・Ⅳ類が顕在化してくる状況がうかがえる。すなわち、相対的に地域的独自性が低下し、近畿地方で成立・展開してきた器種の受容によって類縁関係が漸増していくことが読み取られよう。

続く元住吉山Ⅰ式の段階では、組成する有文器種はいずれも近畿地方との地域差を見出すことが難しく、同一型式の範疇に収まるような様相へと収斂する。こうした実態に鑑みれば、この段階まで彦崎 K2 式の範囲を拡大して、地域型式名を冠する必要性は低く見積もられよう。なお、当該期には遺跡数が非常に少なく、土器様相をうかがうことのできる資料も僅少である。今後の資料増加によって、地域性の検討などを改めておこなう必要があろう。

後続する後期後葉・凹線文土器期は、遺跡数が乏しいことが指摘されており、後期における遺跡動態の画期として評価されている（山本 2020・山口 2024）。土器様相の点でも、引き続き瀬戸内地方の地域的独自性は低調で、近畿地方と同型式の範疇に収まるように看取される。本稿の検討結果からみると、この後期後葉の状況は、後期中葉後半の彦崎 K2 式新段階に端を発するものと考えられよう。この点で、彦崎 K2 式の成立と展開は、単に土器様相だけに転換がみられるだけでなく、地域間関係の動態や遺跡形成・集落動態においても転換期となるものと位置づけられよう。

おわりに

本稿では、瀬戸内地方の縄文時代後期中葉に位置づけられる彦崎 K2 式土器の成立と展開について、有文土器の型式分類と変遷から検討をおこなった。その結果、永井 V 式から元住吉山Ⅰ式にかけての 4 型式 5 段階の編年を示し、各段階の土器群の様相から地域間関係の動態を復元した。彦崎 K2 式の成立と展開には、東西地域との地域間関係の変化と瀬戸内地方の地域的独自性の生成が目まぐるしく展開してゆくことが読み取られ、後期中葉の画期性の一端を具体的に示すことが出来たと考える。

いっぽうで、本論では主として瀬戸内地方と近畿地方・九州北東部との対比を取り扱ったが、隣接する山

陰地方や四国南西部の土器編年との詳細な対比を成していない。これらの地域との関係性を明らかにすることで、さらに西日本における後期中葉土器群の画期とその評価を進めることができよう。また、遺跡群の動態をはじめ集落構造や生業戦略については、ほとんど触れることが出来なかった。今後の課題としたい。

謝辞

本稿は、2014 年度に提出した修士論文の一部をもとに、大幅に加除修正をおこなったものである。本稿を成すにあたっては、以下の方々に指導・助言を頂いた。

泉拓良先生、上原真人先生、矢野健一先生、千葉豊先生、吉井秀夫先生、(故) 阪口英毅先生、(故) 木下哲夫氏、瀬口眞司氏、岡田憲一氏、森本隆寛氏、妹尾裕介氏、木村啓章氏、高野紗奈江氏、福永将大氏

また、資料調査に際して、下記の機関・個人に便宜を図って頂いた。

愛南町教育委員会、大分県教育委員会、岡山県古代吉備文化財センター、岡山市灘崎歴史文化資料館、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、香川県埋蔵文化財センター、笠岡市教育委員会、京都大学考古学研究室、京都大学総合博物館、東京大学総合研究博物館、奈良文化財研究所、安東康宏氏、田島正憲氏

以上、末筆ながら記して感謝申し上げます。

献辞

矢野健一先生のご退官を心よりお祝い申し上げます。矢野先生には、関西縄文文化研究会の活動をはじめ、杉沢遺跡の発掘調査や特殊講義等の場を通じ、様々な機会にご指導を賜りました。本稿の元となった修士論文も、かつて関西縄文研にて発表をさせて頂いたものです。また、私がとある不躰なお願いに上がった際には、「人生とはルールのあるゲームであり、ゲームに負けたときは、その負けを受け入れなければならない」と説いて下さり、それが大切な人生の転機ともなりました。矢野先生の益々のご活躍を祈念して小論を献じるとともに、今後とも変わらずご指導賜りますようお願い申し上げます。

註

- 1) 本稿では、彦崎 K 式の細別として算用数字の彦崎 K1・K2 式を用いることとし、研究史における説明に限って各論者の表記のままとする。
- 2) 千葉豊が指摘するように、木村幹夫が提唱した「竹原 A 下層式」(木村 1953) と同等のものと理解で

きる(千葉 1992)。

- 3) 平井勝は、出崎船越遺跡出土土器を報告するなかで、この点を追認している(平井・保田 1988)。
- 4) 近畿地方の北白川上層式 3 期の型式呼称については議論のあるところだが(玉田・岡田 2010)、本論では狭義の縁帯文土器の様相をのこす段階を「北白川上層式 3a 期」(小泉 2019 の「3 期古」に相当)、内彎口縁深鉢を特徴とする広義の北白川上層式 3 期を「北白川上層式 3b 期」と仮称する。
- 5) ここでは平城式をめぐる議論には踏み込まないが、筆者は平城Ⅰ式と平城Ⅱ式は系譜差をもつものと理解しており、特に平城Ⅱ式とされる土器群は複数型式にまたがる時間幅を有するものと考えている。

参考文献

- 阿部芳郎 1994 「後期第Ⅳ群土器の型式学的検討」『津島岡大遺跡 4』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 石井 寛 1984 「堀之内 2 式土器の研究(予察)」『調査研究集録』5 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 泉 拓良 1981 「近畿地方の土器」『縄文文化の研究 4 縄文土器Ⅱ』雄山閣
- 泉 拓良 1989 「縁帯文土器様式」『縄文土器大観 4 後期 晩期 続縄文』小学館
- 犬飼徹夫 2007 「縄文後期・愛媛県「平城式土器」の型式分類」『縄文時代』第 18 号 縄文時代文化研究会
- 岡田憲一 2008 「近畿地方最後の縄の系譜」『文化財学としての考古学』泉拓良先生還暦記念事業会
- 岡田憲一 2020 「「平行磨消縄文土器群」の成立」『関西縄文時代研究の泉を拓く』関西縄文文化研究会
- 岡田憲一・深井明比古 1998 「佃遺跡出土縄文土器の編年」『佃遺跡』兵庫県教育委員会
- 加納 実 1999 「第 3 回原始文化研究会の岡本勇先生のもの」『土曜考古』第 23 号
- 鎌木義昌・木村幹夫 1956 「中国」『日本考古学講座 3 縄文文化』河出書房
- 鎌木義昌・高橋護 1965 「縄文文化の発展と地域性—瀬戸内—」『日本の考古学Ⅱ縄文時代』河出書房
- 川越哲志ほか 1984 「福山市宇治島北の浜遺跡の第 1 次発掘調査」『内海文化研究紀要』第 12 号
- 木村剛朗 1995 『四国西南沿海部の先史文化』幡多埋文研
- 木村幹夫 1953 「岡山県上道郡竹原貝塚について」『吉備考古』第 87 号
- 小泉翔太 2014 「北部地区、南部地区出土土器の位置

- づけ」『京都市一乗寺向畑遺跡出土縄文時代資料 — 考察編 —』京都大学大学院文学研究科考古学研究室
- 小泉翔太 2019「北白川上層式の様式構造について — 京大植物園遺跡出土土器の再検討から —」『東海からみた後期前葉土器群その 2』東海縄文研究会
- 幸泉満夫 2014「津雲 A 式土器の型式学的研究」『古文化談叢』第 71 集 九州古文化研究会
- 幸泉満夫 2016「彦崎 K1 式土器の型式学的研究」『古文化談叢』第 75 集 九州古文化研究会
- 小南裕一 2013「東北九州における縄文後期中葉土器に関する一考察」『私の考古学』丹羽祐一先生退任記念事業会
- 佐々木謙・小林行雄 1937「出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺跡」『考古学』第 8 卷 10
- 澤下孝信 2016「縄文・後期中葉の様相 — 北久根山式土器を中心として —」『研究紀要』第 20 号 下関市立考古博物館
- 潮見 浩 1960「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要』第 18 号
- 田中良之・松永幸男 1984「広域土器分布圏の諸相 — 縄文時代後期西日本における類似様式の並立」『古文化談叢』第 14 集九州古文化研究会
- 玉田芳英・岡田憲一 2010「近畿」『西日本の縄文土器後期』真陽社
- 千葉 豊 1987「備前市新庄西畑田遺跡採集の縄文土器」『古代吉備』第 9 集 古代吉備研究会
- 千葉 豊 1989「緑帯文系土器群の成立と展開」『史林』72 卷 6 号
- 千葉 豊 1992「西日本縄文後期土器の二三の問題」『古代吉備』第 9 集 古代吉備研究会
- 千葉 豊 2007「高知平野における縄文後期前・中葉の土器編年」『縄文時代』第 18 号 縄文時代文化研究会
- 千葉 豊 2010「山陽」『西日本の縄文土器 後期』真陽社
- 千葉 豊（編）2010『西日本の縄文土器 後期』真陽社
- 橋本雄一 1994「彦崎 K2 式に先行する土器群について」『津島岡大遺跡 4』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 林 潤也 2002「北久根山式土器をめぐる諸問題」『四国とその周辺の考古学』
- 平井 勝 1993「縄文後期・四元式の提唱 — 彦崎 K2 式に先行する土器群について —」『古代吉備』第 15 集 古代吉備研究会
- 平井 勝・安田義治 1987「玉野市出崎船越遺跡出土の遺物」『古代吉備』第 9 集 古代吉備研究会
- 福永将大 2016「北久根山式土器の再検討」『九州考古学』67 九州考古学会
- 福永将大 2020『東と西の縄文文化 — 縄文後期社会構造の研究 —』雄山閣
- 福永将大 2024「西平式土器の成立と展開」『東アジアの新たな地平 上』中国書店
- 前田敬彦・千葉豊 1999「海南市且来 I 遺跡出土の縄文土器」『古代文化』第 51 卷第 3 号
- 間壁忠彦 1980「縄文後期彦崎 K（竹原）式をめぐる」『倉敷考古館研究集報』第 15 号
- 水ノ江和同 1992「西平式土器に関する諸問題」『九州考古学』第 67 号
- 水ノ江和同・前迫亮一 2010「1. 九州」『西日本の縄文土器 後期』真陽社
- 山口雄二 2024「中部瀬戸内地域における凹線文系遺跡をめぐる論点」『中四国の凹線文土器群』中四国縄文研究会
- 山崎真治 2007「彦崎諸型式の再検討」『彦崎貝塚の考古学的研究』東京大学総合研究博物館
- 山下大輔 2002「関西大学博物館所蔵の津雲貝塚出土資料」『関西大学博物館紀要』8 関西大学博物館
- ※発掘調査報告書等は省略